

2022年 11月講座のまとめ

講座テーマ： 高等学校 歴史総合 近代化とわたしたち

「フランス革命と明治維新の比較探究学習」

講師：高等学校教諭 周藤 新太郎さん

【講師：周藤新太郎さんより】

今回報告に際して、歴史総合の前期での私なりに授業をまとめることができました。

とくに問いを作る4つのゾーンに生徒が書いたポストイットを分けて貼る方法について「よくわからない、興味がない」ゾーンに生徒が書いたポストイットに対してのご質問があり、私自身、その点についての分析はなされていなかったことに気が付きました。

そこで、今すすめている授業では、分からない点を3段階に生徒で分類させそこから問いを作らせる方法をためています。大変貴重なご質問をいただき感謝しています。

今回の報告をさせていただき、私なりに一歩前進できた気持ちです。ありがとうございました。

【参加者から】

* 私は、勤務校で日本史の授業を担当しております。

フランス革命と明治維新、「刷新」といった意味では同じですが、両国の国家(国王や天皇)のかたち、民衆の意識など、相違点もあると思います。両者を比較し、「共通点」・「相違点」を見出すことで、結果的に、子どもたちは両者の出来事の輪郭をえがけるようになるのかなと思います。そこに比較探究の意義を感じました。

私は勤務校で中学歴史・高校日本史を担当していますが、日本における近代化(産業革命→資本主義→社会主義など)や帝国主義などを説明する際には、諸外国の近代化・帝国主義についても踏み込んで取り扱っております。

一点(日本からみた世界)だけではなく、違った視点(世界からみた日本)から歴史を考察することで、また違った景色が見えてくると思います。そして、それぞれの視点を組み合わせることで、より立体的に歴史を理解し、考察できるようになると私は思います。そのような意味でも、今回の授業づくり講座、共感できるポイントが多かったです。歴史学習の根幹となるであろう「探究」学習の実践のために、授業のかたちも、試行錯誤しながらも、従来の形から脱皮していかなければ行けないと思います。

生徒たちが比較しながら「問い」を組み立てていく授業、とても大切なことです。私も、これからの授業づくりの一つの材料として参考にさせていただきたいと思います。

* 周藤先生の報告は、丹念な教材研究に裏打ちされていることが伝わってきました。生徒から問いを立て、調査を通して検証し、考察していくという、生徒主体の実践に感銘を受けました。私が経験してきた歴史の授業は、受験対策のための知識注入型であり、大学で歴史学を専攻した時に激しくギャップを感じました。そのため、周藤先生のような、大学受験に囚われない、子どもたちの学び合いや批判的思考力を大切にされている歴史の授業が広がることを願っています。生徒からの問いの出し方として、「分かること—興味」を軸としたブレインストーミングの方法は

大変勉強になりました。疑問を抱くことが苦手な生徒にとっては指標になると思います。また、4人グループで疑問を出し合う活動は、生徒たちが自発的に調べるモチベーションを上げることにつながると感じました。この場面の生徒たちの様子を是非直接見たいと思いました。

生徒たちが積極的に調べ、考察していることがプレゼン内容や考察レポートからも伝わりました。特に、提示していただいた考察レポートでは、調べた情報をもとにグループ間で話し合ったことを、高校生なりに丁寧に考察している姿が目に見えられました。しかし、ここで気になったのは、生徒Eの考察レポートにまとめられた情報の根拠が弱いことです。周藤先生の報告レポートにも、「この生徒Eの『考察レポート』は、事実関係よりも、調べてまとめてあり、文章量も十分なので評価はAとした」とあるように、この授業では考察プロセスと表現に焦点が当てられていますが、やはり事実関係・情報の根拠も重視した方が良いのではないかと考えています。なぜならば、誤った歴史認識を持ったまま巧みな表現力をもつことは、極論、歴史修正主義につながり得るからです。

最後の討論は、①「フランスと日本の政治は結果的にどちらが良かったのだろうか」という価値判断、②「フランス革命と明治維新の影響は現在でもあるのだろうか」という現在との連関、③「自分が参加するならフランス革命か明治維新か」という当事者性、④「明治維新が急進的だったらどうなっていたのか」という仮定形、が主なテーマの分類で、このようなテーマが生徒から発せられたことに素直に驚きました。生徒たちが、問い→調査→考察→発表という流れで満足するだけでなく、さらに発表を通してまた問いを創り出し、考えを深めていけるように、周藤先生が意識しながら指導されていることがうかがえました。また、討論の際の座席の配置を、教室を囲むようにクラス全員の顔が見える形にすることで、生徒たちが対等な立場で意見が言えるように配慮している点も勉強になりました。

今回の授業づくり講座で大変勉強になりました。改めてお礼申し上げます。また周藤先生に学ばせていただきたく存じます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

* 今回の周藤先生の報告を聞いて、今まで私が体験してきた歴史の授業とは大きく異なるものであることを改めて実感した。今までは、私も含めて大学受験対策で用語や人物をひたすら暗記して乗り切る授業が多かった。しかし、歴史総合は課題・テーマ史が中心で探究する活動や話し合い、発表する活動が多かったので、本当に大学のゼミのような感じであると思った。言い換えれば、高校の段階で「自ら問いや課題を立て、その結論を出すために正しい情報をもとに根拠を拾いながら調べていく」姿勢が求められていることを痛感した。もっと言えば、小学校の社会科の段階から「調べ学習」の活動を行っていくことで、着実にレベルアップできるように指導していかなければならないと考えた。それが小学校教員としての責務ではないかと考えた。

グループ討論では、情報リテラシーや図書館の活用について話題となったが、特に歴史は安易にインターネットで調べると、信憑性を疑うようなものや思想に偏りのあるものがたくさん出てくる。そういった情報を鵜呑みにせず、きちんと文献も合わせて調べることを確実に指導していかなければならないと感じた。大学生でも安易にインターネット情報だけでレポートを提出する学生が多い。特に進学を考えている生徒が多いような高校では、より一層そういった姿勢を身に付けさせることの重要性を実感した。

* 本日は貴重なお話ありがとうございました。将来高校で世界史の教員を目指している私にとって、とても参考になるお話でした。

今回まず感じたことは「難しい・・・」でした。若手の時にこれを実践できるかな・・・とは思いましたが、自分の将来の勤務校で使えるところを取り出して自分なりに追試していきたいと思いました。石出先生の授業で遅塚忠美先生の『フランス革命』は読まされたのですが、今日の講座を機にもう一度読み返したいと思いました。またこれからもイベントに参加させてください。ありがとうございました。

* ご報告ありがとうございました。周藤先生の授業実践報告、以前より楽しみにしていました。なぜならば、大学時代の友人が、周藤先生の教え子であり、周藤先生の世界史授業に影響を受けて、アルザス史に関心を持ち、現在も言語学の視点からフランス語やアルザス語の研究を進めているからです。以下の計4点が印象に残りました。1点目は周藤先生の「歴史総合は何をやっても良い」というお言葉です。その根拠の1つとして、「歴史総合」教科書計12冊は教科書会社によって学習内容が大幅に異なります。さらに、先日公開された「令和7年度試験・共通テスト問題」の「歴史総合・世界史探究」と「歴史総合・日本史探究」の「歴史総合」分野からも明らかです。以下リンクになります。

https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/r7ikou/r7houkousei.html 以上より、私自身は「歴史総合＝歴史の大きな変化について、現代的な諸課題を視野に入れて、問いと資料から探究型の歴史学習」と考えております。すなわち、各教員と生徒が、「近代化と私たち」、「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、「グローバル化と私たち」について、関連するテーマを設定し、「歴史の扉」を追体験できれば良いのではないのでしょうか。2点目は「問い→仮説→資料収集→資料分析→考察→発表」という探究のプロセスを意識された授業実践です。「歴史総合」では周藤先生がおっしゃる通り、生徒が主人公になり、上記の探究プロセスを何度も繰り返していくことが重要に思われます。3点目は知識・技能を深める際に「年表づくり」という活動です。新学習指導要領では「知識・理解」ではなく「知識・技能」になっていることから「知識」を活用する「技能」にも注目していきたいです。そこで、「年表づくり」という手法は参考になりました。4点目は「歴史総合」のまとめに位置づけられる「現代的な諸課題の形成」について「進級論文」は良いですね。すなわち、「歴史総合」では、最終的に、生徒が自らテーマを設定し、「問い→仮説→資料収集→資料分析→考察→発表」を意識しながら、探究し続けることが目標になるのではないのでしょうか。そこで、「歴史総合」において「レポート」ではなく「定期考査」が有効なのか、疑問を感じています。最後に、周藤先生の「歴史総合」授業実践について続編も楽しみにしております。

* 「問い」を立て、「調べ」、「まとめ」、「発表・共有」をし「振り返る」という学習の大切な流れについて、高校生ではどのようなことができ、どのような学ぶ姿になるのかのイメージを持つことができました。小学校で行うには、レベルを下げたり、内容をかみ砕いたり、さらに手厚い支援が必要になるだろうと思いましたが、周藤先生の実践を参考に、チャレンジしてみたいと思いました。特に、問いを立てる際の「座標軸」については、ぜひ使ってみたいと思います。

ブレイクアウトルームでの意見交流では、学生、中学校教員、高校教員と様々な立場や視点

からの考えを聞くことができ、自分の考えが深まりました。中でも、「情報化社会と言われながら、情報収集能力がみについていない」という意見については考えさせられました。社会の授業で身につけるべき力をしっかりと身につけることができているのか、そのための展開や活動になっているのか、自分自身の授業について反省する良い機会となりました。

* 周藤先生の授業実践は高校の歴史総合の専門性の高さが分かる報告でした。フランス革命と明治維新を比較するという視点も私にはないものばかりでした。生徒たちの学習の様子でも様々な角度から、2つの出来事を予想しているところもこの授業のすごいところだなと思いました。

私がこの授業を行うとして、まだまだフランス革命や明治維新、そしてその周辺の知識も足りないと感じました。一方で歴史総合では、生徒たち自身が調べたり研究したりすることで歴史を学ぶ意味や考える力の育成にもつながると思いました。教員としての専門性の高さも必要だと思うのでこれからも知識をつけていきたいと思ひますし、歴史総合では生徒に考えさせたいこと等、教え方の幅もまた広がっているように思ひます。そのような授業が歴史総合で行えるのか知っていきたく思ひました。ありがとうございました

* 今回は新しい様々なことが勉強になりました。

歴史総合は中学校で学んだ地理、歴史、公民など歴史だけでなく、様々な知識が求められます。それと同時に私たち日本国民が持っている感覚が、必ずしも世界のスタンダードではないと言うことも学ばなくてはならないということも感じました。

今まで学んできたことの知識の活用ということが歴史総合には求められますが、個々人の知識の幅や差はバラバラで、これを把握しながらどのように授業を進めるのかとても難しいと感じました。まだまだこの試みは始まったばかりで、先生が今後どのように歴史総合の授業を発展させていかれるのかとても興味があります。また機会がありましたら、どのように今回発表していただいたものと考え方の変化や取り組みの変化が生まれたのかお聞きしてみたいです。

私は、現在、特別支援学校高等部に勤務して、今回の歴史総合のような授業はなかなか展開できない実情がありますが、個々の社会科の知識の広がりやをどのように支援していくべきかとても考えさせられました。生徒の実態は広く、文字理解がない生徒から、中学校1年生の内容を勉強している生徒までいるので授業展開も含め自分の授業をもう一度考えたいと思ひます。

【司会から】

11月講座は、歴史総合の授業づくりをどのようにおこなうかについて、周藤先生より報告がありました。グループの中で生徒自らが問いを考え、考察しながら歴史を学ぶという形式が、主体的・対話的で深い学びの実践になっており、教師が一方的に教え込むのではなく、生徒が主体的に学びに向かう授業スタイルが確立されていて、大変勉強になりました。進学校の授業は少なからず、大学受験を念頭に置いて授業を進めることが期待されている中でも、今回の報告のように生徒が考え・学ぶ授業スタイルを大切にしていきたいと強く感じました。

また、調べたことをパワーポイントにまとめ、発表する形式も生徒の表現力を培う上でとても有効だと思いました。私の勤務する軽度知的障害の特別支援学校の生徒もこれからパワーポイントで「SDGs」について調べたことを発表する予定ですので、今回学んだことを自分の実践に役立てていきたいと思います。周藤先生、ありがとうございました。

次回の1月講座もたくさんのご参加をお待ちしております。